

(桑木或雄著 『黎明期の日本科学』) 序

桑木嚴翼

科学史の知識が科学研究上必要であることは、純粹科学理論の学徒にあつては今は殆ど常識になつて居るが、然もなお之に就て疑義を有する者のあることは、畢竟科学の末梢的技術を以て科学の本質的体系と誤るもの、若しくは其の部分的詮索を以て全体的組織を盡し得たと認めるものに過ぎない。我が弟或雄博士は夙に此の点に着目し、或は古書文献の遺物を蒐集して資料を準備し、或は先進同学の業績を参照して思索の模範をし、自ら学界の新領域を開拓せんことを期して居た。会々日本科学史編纂の依頼を受けて竊に多年攻究の結果を発表する機会を得たることを喜び、銳意其の業に當つて時には寢食を忘るる趣があつたが、皇天何ぞ無情なる、忽然病に斃れ、志を齎して幽明境を異にするに至り、遂に其の一生の努力を挙げて水泡に帰せしめた。是れ独り一人の不幸に止まらず、学徒の期待に背くもので、学界の為に痛恨已むなき所である。此の事は近親たる為に懷抱する遺憾の念と謙抑の慮より生ずる私情を離れて我が敢て揚言憚らない所である。然も我等兄弟皆父祖の遺風を受けて、広く群籍を涉獵するを樂しむを得たが、其の獲得せる所を以て直ちに大文章を草するの力量に乏しく、殊に我が弟は慎重細密事に當ることを習とし、苟くも疑わしき所あれば百方精査するを厭わず、的確なる実証を得ない所があれば終に之を筆にすることを肯じない。然も為に探求は往々岐路

に入つて本道を離れるに至り、容易に其の大綱を捉えることを得ないようになる。此の如くして多年攻究の間、緒餘の業として機に触れ時に応じて各般の題目に関する記述と評論とを公けにしたことはあるが、結局皆断片的随想の域を脱しないものが多かった。斯くして今となつては、ただ嘗て是等断片を集録した『科学史考』の一書並びに「アインシュタイン伝」及び其等の中に洩れた若干の講演論文等とのみが、故人の記念となるに止まることとなつた。然も是等の著書論文も、伝わる所広からず、遂に湮滅して人に忘られるに至ることを恐れるのみである。此時に当り、長男務次男道生両君が近親たる義兄等の助力を得て是等遺著を増補校訂して世に伝えんとせられたことは、真に機宜を得たもので、大孝之に如くはないと謂わざるを得ない。思うに修史の業を以て単なる資料の蒐集や事件の記述のみを以て足れりとせず、科学史を編するには先ず一般修史の法を究めるを要すとして、資治通鑑や二十二史なども通読せんとした故人に取つては、其の著が後に後の学者に資料を供するものとなつたことは必しも十分の満足を買うに適しないものであるが、ただ頭脳中に描出するに止まつた計画考案は他より窺うに由なく、時に随つて摘記した紙片は散佚して全く存せざるに至つた際、此の遺著の出版によつて自己の一生が必しも無意義でなかつたことを覺り得て少く快心の笑を洩らすことを得るであろう。務君等諸氏の勤勉空しからず、既に其の書が近く刊行せらるに至つたことを聞き、常に其の学識を抱いて空しく世を捐てたことを憾みとして居た我等残存の兄弟に取つて比べるものがない悦喜を催させるものである。会々序文の依嘱に接したので、欣然筆を駆して此の一文を草した。我と同じく罹災家を失つて遠く山地に寄寓する末弟来吉も、亦必ずや感を同じくするものがあるだろう。文中徒らに近親を推賞するの嫌があることは、既に辯じた通りであるが、猶且つ公けにすべきことでないようにも感ぜられるが、思うに寛厚なる読者は、我等の哀情を察し、此の無遠慮無作法を諒とせられるであらうか。

昭和二十一年十月

桑木巖翼

- 桑木或雄著『黎明期の日本科学』（弘文堂書房、昭和二十二年）所収。
- 読みやすさのために、旧漢字は新漢字に、旧かなは新かなに変更し、適宜振り仮名をつけた。ただし、一部の漢字は旧漢字のままにした。
- PDF化にはL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X<sub>2<sub>ε</sub></sub>でタイプセッティングを行い、dvipdfmxを使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。